

# 新しい何かを生み出すために、 企業のDNAを受け継いだチャレンジ精神で、 世界と渡り合える研究者に。

## 松村 益寛(マツダ株式会社)

### 会社概要

広島県の原動力として広島の自動車産業と経済を支え続け、2020年で創業100年を迎えた。人間中心の開発哲学に基づいた革新的な技術力から生み出される、「走る喜び」を体現する独自性の高い製品を開発し続けている。



技術研究所

松村 益寛 (34才)  
YASUHIRO MATSUMURA

- 2016年 / 広島大学総合科学部・大学院総合科学研究科 入学
- 在学中 / 「日本金属学会水素化物に関わる次世代学術・応用展開研究会」で研究が発表され、優秀ポスター賞受賞
- 2020年 / 博士号取得



## 「博士号は説得力」、 先輩の後ろ姿から湧き上がった向上心。

戦後広島復興を成し遂げた不屈のチャレンジ精神を受け継ぎ、社員のチャレンジを奨励・推奨する企業文化を持つイノベーション企業、マツダ株式会社。研究職として自動車排ガス用浄化触媒の材料開発に従事する松村益寛氏も、その文化をしっかりと受け継ぐマツダ社員のひとりである。「学生時代から、博士号をとりたいという思いはありました」と言う松村氏だが、その思いを一層強めたのは入社後、博士号を持つ多くの先輩たちが第一線で開発を行う後ろ姿を目にする中でのことだった。折しも入社5年目、日常の業務にも慣れ、社内・社外の研究者との議論の場も増えたが「博士号を持っていないことで相手の受け取り方が違う」と肌感として理解するようになった。とりわけ海外企業との間では「ドクター」



を持たないことで顕著に違う扱いを受けることも。「博士号は説得力」だと痛感したこと、また、研究者としてスキルアップしたいという向上心が、大学院進学モチベーションとなった。

## 会社とは違う研究テーマを設定、幅広い研究から新たなイノベーションを生み出したい。

研究職として勤務する者が博士号取得を目指す場合、自身が行う研究を共同研究先の大学院などでさらに深め、博士号へとつなげることが多い。しかし松村氏が選んだのは研究所で行っていた自動車排ガス用浄化触媒についてではなく「水素化物バナジウムを用いた全固体リチウムイオン二次電池の負極特性」、「次世代エネルギー」についてがテーマだった。研究所が取り組む「ゼロ・エミッション」との関連性はあるが、自己啓発であるためプライベートでの時間を割くこととなる。スキルアップを推奨する職場環境ながら珍しいケースだったこともあり、上司へは、広い意味での専門知識を習得することで「必ず業務にフィードバックします」と先立って約束をしたという松村氏。広島県未来チャレンジ資金を取得することで金銭面での負担は軽減されたものの、覚悟

をしての進学だった。

しかしその背中を押していたのも、マツダの文化そのものだった。オープンイノベーションを奨励するマツダでは、専門分野の違う研究職が隣り合って議論を交わすことも多い。「その中から新しいものが生み出されていくのを、日々目にしていました。自分の専門分野だけでなく広い視野を持っていないと、理解はおろか生み出すこともできない。ひとつのことに尖って同じ場所に行き着くのではなく、幅広い学問から何を学んで何をもち込むことができるか。他社とは違う『マツダらしさ』をどうやって形作るか。『チャレンジ精神』に惹かれて入社した会社です。難しいやり方かもしれないけれど、チャレンジしてみようと思いました。」



## 潜在する課題を見つけ出す、学会でも高い評価を得た次世代エネルギーの新たな可能性。

広島大学大学院の研究室で題材としたのは、水素貯蔵材料として着目されてきた水素化バナジウムを、リチウムイオン電池で利用するという新しい着眼点による研究だった。この研究において松村氏は、熱力学的に不安定な物質である水素化バナジウムが、リチウムイオン電池での充放電に利用できる可能性を初めて解明、画期的な研究成果を残した。石油コンビナートから排出される水素を活用した次世代エネルギーともなりうるこの研究は、日本金属学会で優秀ポスター賞を受賞するなど、

高い評価を得ている。

大学院での最たる学びは「『博士とは世の中に潜在する課題を自ら見つけ出し、その解決手法を自ら考案し、最終的に結論を導き出すことが一人のできるスキルを身に着けた人』だと知ったこと」と松村氏。「埋もれている中から自分だからこそできることを見つけていけば、過去の真似ではない、新しいものが生み出せます。また、どんなに膨大な知識を持っていても表現の仕方を知らなければ何も伝わらない、というのも、大学院で学び実務でも役に立っていることのひとつですね。」

## 興味のあることを学べば 可能性が広がる。

「探究心を満たす時間を必ずとるとするのは、必要なことだと思うんです。」Googleなどが推進する、勤務の一定時間を個人の興味に費やす「20%ルール」を例に、松村氏は語る。「例えば24時間の中から30%を自分の

好奇心のために使う。もちろんお金や時間というリスクもあるかもしれませんが、その30%で人は成長することができる。別分野での博士課程取得は確かに大変でしたが、興味のあることを学んだだけで、可能性が広がったとも言え換えることができます。博士となった今、海外の研究者とも対等に議論できる立場になりました。マツダから、世界で戦える研究者になってみせます。」

### 広島県未来チャレンジ資金ご利用希望の方へ

私の場合、現在担当している業務とは異なる研究テーマを設定して博士号を取得したので、日々の業務と両立させることはかなり大変でした。それゆえ大学院進学を軽い気持ちで薦めることはできませんが、それでも、自分のやりたいことへチャレンジするのは、早ければ早いほど良いと思います。また、人材育成の面から語らせてもらうなら、若い社員にバイタリティーとエネルギーがあるうちに専門的な技術や知識を身に付けてもらうことは、会社のプラスになるはず。大学院進学は、個人にとっても会社にとっても「未来」を切り拓く一助になると確信しています。